

源氏物語のメヅラシ・メヅラカナリ小考

柴 田 敏

1

メヅラシとメヅラカナリとは、同じ語幹メヅラを持つ形容語であって、その用法にも似たところがある。

大野晋編『古典基礎語辞典』（角川学芸出版、二〇一一）では、両者の用法について次のように説明している。

メヅラシ（メヅラシの「解説」については、省略する。）

- 語釈 ①まれなこととして賞美される。好ましい。（用例は省略する。以下同じ。）
②めつたになくてうれしい。めつたになくてすばらしい。
③目新しい感じがする。新鮮だ。
④まれである。変わっている。

メヅラカ

解説 形容詞メヅラシ（珍し）から作られた形容動詞。メヅラカは、よいことにも悪いことにも用い、見たこともなく思いもよらない意外なさまをいう。

語釈 例のないさま。見たこともないさま。意外なさま。

メヅラシは、喜びや感動を持つて受け止められるような対象について用いられる。それに対して、メヅラカナリにはそのような価値付けを伴った受け止めはなく、要するに「珍しい」ということである。両者についての説明は、現在おおむねこのようなものだと考えられる。

しかし両者の用法の違いには、まだ明かでないところがあると思われる。

たとえば源氏物語においては、たとえば同じ光源氏について、次のような例が現れる。

いつしかと心もとながらせ給ひて、急ぎまゐらせて御覧するに、メヅラカナルまじの御かたちなり。（桐壺）

この御子のおよすげもておはする御かたち、心はへ、ありがたくメヅラシキまで見え給ふを、えそねみあえ給はず、物の心知りたまふ人は、かかる人も世に出でおはするものなりけり、とあさましきまで目おどろかし給ふ。（桐壺）

初めの例がなぜメヅラシでないのか、なぜ赤子の光源氏を、桐壺帝は感動もなく、「見たこともない」というだけの受け止めをしているのか。

それに対して、三歳になつて袴着を終えた光源氏には、メヅラシが用いられている。

以下、源氏物語におけるメヅラシとメヅラカナリの用法について、検討してみたい。

2

全体として見ると、確かにメヅラシの方に喜ぶべきこと、感動をもよおすことについて用いられている例が多い。

たとえば紫の上についての記事では、おおそメヅラシが用いられる。

にはひなまめきたるさまさまのかをりもとりあつめ、めでたき盛りに見え給ふ。こそよりこしはまさり、きのふよりけふはメヅラシク、常に目馴れぬさまのし給へるを、いかでかくしもありけんとおぼす。(若葉上)

紫の上が亡くなった翌朝の様子を描く次の場面ではメヅラカナリが用いられているが、皆が悲しみにくれているのであるから、ここには喜びや感動を伴うメヅラシは用いられないであらう。

宮も、帰り給はで、かくて見たてまつり給へるを、限りなくおぼす。たれもたれも、ことはりの別れにてたくひあることとおぼされず、メヅラカニいみじく、明けぐれの夢にまどひ給ふほど、さらなりや。(御法)

魅力的な異性、またそのような異性への関心を描く場合にも、メヅラシが用いられる。

ましていまはあぢちはくる人もあと絶えたるに、かく世にメヅラシキ御けはひの漏りにほひくるをば、なま女ばらなども笑みまけて (未摘花)

君は、塗籠の戸の細めに聞きたるをやをらおし聞けて、御屏風のはさまに伝ひ入り給ひぬ。メヅラシクうれしきにも、涙落ちて見たてまつり給ふ。「なをいと苦しうこそあれ。世や尽きぬらむ」とて、(賢木)

かの下が下と人の思捨てし住まひなれど、そのなかにも思ひのほかにくちをしからぬを見つけたらば、とメヅラシク思はずなりけり。(夕顔)

ただし、既婚女性への求愛のように倫理にもとる場合には、メヅラカナリが用いられる。

すこし思ひのどめよとおぼされば、あはれとだにのたまはせよ」と、をとしきつゆるを、いとメヅラカナリ、とおぼして、ものも言はむとおぼせど、わななかれて、いと若々しき御さまなり。(若菜下)

「分けゆかも草葉の露をかこにてなほ濡れ衣をかけんとや思ふ
メヅラカナルことかな」とあはめ給へるさま、いとをかしうはづかしげなり。(夕霧)

既婚女性相手でなくとも、女性が男性の恋情を拒む場合にはメヅラカナリが用いられる。たとえば、宇治八の宮の大君が、薫の求愛を難じる場面である。

いとむくつけくて、なからばかり入り給へるにひきとどめられて、いみじくねたく心うければ、「隔てなきとはかるを言ふらむ。メヅラカナルわざかな」とあはめ給へるさまのいよいよをかしければ、(総角)

同様の例として、親代わりとして引き取った玉鬘に対して言い寄る光源氏の振る舞いには、メヅラカナリが用いられる。

「さらすとも、かくメヅラカナル事は、世語りにこそはなり侍りぬべかめれ」とのたまへば、
「メヅラカニやおぼえ給ふ。げにこそまたなき心ちすれ」とて寄りぬたまへるさま、いとあざれたり。(螢)

メヅラシとメヅラカナリの用法が、倫理に基づいて区別されているのではあるまいが、何らかの価値観がかかわっていることが考えられる。

3

次に音楽の演奏にかかわってメヅラシ、メヅラカナリが用いられる例について見る。

まず、これについては、メヅラシ、メヅラカナリのどちらの用例もあることを確認する。

御方がたの若き人どものわれおとらじと尽くしたる装束、かたち、花をこきまぜたる錦にとらず見えわたる。世に目馴れずメヅラカナル樂ども仕うまつる。(胡蝶)

朱雀院より渡りまゐれる琵琶、琴、内よりたまはり給へる箏の御琴など、みなむかしおぼえたる物の音どもにて、メヅラシク掻き合はせ給へるに、何のをりにも過ぎにし方の御ありさま、内わたりなどおぼし出でらる。(若葉上)

ただ胡蝶巻の例では楽人が演奏しているが、若葉上巻の例では楽人はすでに退出しており、光源氏らが掻き合わせているのである。前者がメヅラカナリ、後者がメヅラシクであることからすると、行為の主体の階層が、メヅラシ、メヅラカナリの使用にかかわっているようにも見えるのである。

次のメヅラカナリの例は、手放しの賞賛とはいえないようだ。これは夕霧による評だが、「昔の名手の演奏を知らなくて比べられないので」、柏木の和琴や堂宮の琵琶を最近のメヅラカナル例としておりますが、というのである。

上りての世を聞き合はせ侍らねばにや、衛門督の和琴、兵部卿宮の御琵琶などをこそ、このごろメヅラカナルために引き出で侍めれ。げにかたはらなきを、こよひうけたまはる物の音どもの、みなひとしく耳おどろき侍るは(若葉下)

それに対して、光源氏が演奏する場合にはメヅラシと称賛されている。

心もて草のやどりをいとべどもなほ鈴虫の声ぞふりせぬ
など聞え給て、琴の御琴召して、メヅラシク弾きたまふ。(鈴虫)

メヅラシ、メヅラカナリの使用と階層とのかかわりについて、さらに次の例を見ておきたい。

行幸と言べどかならずかうしもあらぬを、今日は親王たち、上達部も、みな心こくに御馬、鞍をととのへ、隨身、馬副の、かたちすだち装束を飾りたまうつつ、メヅラカニをかし。

(中略)

親王たち、上達部なども、鷹にかかづらひたまへるは、メヅラシキ狩の御装ひどもをまうけ給ふ。近衛の鷹飼いどもは、まして世に目馴れぬ摺衣を乱れ着つつ、けしきことなり。

(行幸)

「親王たち、上達部など」に対してはメヅラシで評しているが、「隨身、馬副」が加わるとメヅラカナリを用いている。やはり両語の選択に、階層差がかかわっているように見えるのである。

これについては椎本巻に次のような例があつて、右の諸例に対する反例のようにも見える。

何とも見ざりし山がつも、おはしまさで後、たまさかにさしのぞきまいるは、メヅラシク思ほえ給。このごろのこととて、薪、木の実拾ひてまゐる山人どもあり。(椎本)

宇治八宮の死後、宮の姫君たちにとっては、「山がつ」の訪れさえメヅラシク思われるというのである。しかしこれは、山がつの訪れさえ喜ばしいという、世に忘れられた姫君たちの零落ぶりを印象付ける用例ではないかと思う。そもそも彼女たちにとっては、目前に山がつが現れたとしても別に「見たこともない」とは感じられないであろう。

4

次に、風景について用いられたメヅラシ、メヅラカナリの例について見る。
まず、メヅラシが用いられているのは次のような場所である。

北山

山の桜はまだ盛りにて、入りもておはするままに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば、かかるありさまならひ給はず、ところせき御身にて、メヅラシウおぼされけり。寺のさまもいとあはれなり。(若紫)

住江

御門より外の物見をさをさし給はず、ましてかく都のほかのありきは、まだならひ給はねば、メヅラシクをかしうおぼさる。(若菜下)

宇治

川ぞひ柳の起き臥しなびく水影など、おろかならずをかしきを、見ならひ給はぬ人は、いとメヅラシク見捨てがたしとおぼさる。(椎本)

都にはまだ入り立たぬ秋のけしきを、おとはの山近く、風の音もいと冷やかに、楨の山べもわづかに色づきて、猶、尋ね来たるに、をかしうメヅラシウおぼゆるを、宮はまいて、例よりも待ちよろこびきこえ給ひて、(椎本)

宇治の景色については、匂宮(前例)も薫(後例)も、同じくメヅラシと称賛している。

一方で、メヅラカナリが用いられるのは、須磨の地の風景についてである。

須磨

海づらはやや入りて、あはれにすゞげなる山中なり。垣のさまよりはじめてメヅラカニ見給ふ。茅屋ども、葦ふける廊めく屋などをかしうしつらひなしたり。(須磨)

これや海女の塩焼くならむとおぼしわたるは、おはします後ろの山に、柴といふものふすふるなりけり。メヅラカニて、

山がつのいほりに焚けるしばしばもこと問ひ来なん恋ふるさと人(須磨)

からうしてたどり来て、「かかる目は見ずもあるかな。風などは吹くもけしきつきてこそあれ、あさましうメヅラカナリ」とまどふに、猶やまず鳴り満ちて、雨の脚、当たる所とほりぬべくはらめきおつ。(須磨)

最後の例は光源氏の従者の言だが、身の毛もよだつ風に当惑しているのである。

5

このような用例から見て、やや乱暴な推論かもしれないが、次のように考えてみてはどうだろうかと思う。

源氏物語の中で、ここまでに見たようなメヅラシが用いられるのは、王朝貴族社会の最上層に属する人々の世界において、喜びや感動を持って受け止められるような対象についてであるように思う。その最上層の社会の構成員には、帝、皇族、上達部クラスの貴族と、その妻、娘、また女房などが含まれるのであろう。そういった人々に共有された価値観として、自らの社会の栄華があつたであろう。その栄華を象徴するような美しさが実現された場合に、すばらしい、期待以上だと言祝ぐ用法が、これらのメヅラシではなかつただろうか。

一方のメヅラカナリは、そのような平安朝貴族社会最上層の人々が属する世界の外にあるもの、その世界に嵌り込まないものについて、意外だ、予想外だという時に用いられるようである。

これまで見てきた例について、この見方を適用すると次のようになる。

男女の情愛は、この社会の関心にも美意識にかなうものであるからメヅラシが用いられるが、道に外れた恋などは、その埒外ということでメヅラカナリと評される。

音楽を演奏する場合には、まず演奏者がその世界に属するかどうかでメヅラシ、メヅラカナリの使用が分けられる。そのため、演奏者がともにその世界に属している時には、メヅラカナリと評される方が相対的に評価が低いニュアンスになる。その他の技芸や、姿の美しさについても同様である。

風景の場合、この社会が構成する美の世界の中に入っている場所であればメヅラシ、その外側の辺境、僻地であればメヅラカナリ、となる。

よく知られたこととして、物の怪、生き霊のような人知を超えた存在が起こす出来事にはメヅラカナリが用いられる。

むかしの物語などにこそかかる事は聞け、といとメヅラカニむくつけけれど、まづこの人いかになりぬるぞと思はす心さはきに、身の上も知られ給はず添ひ臥して（夕顔）

6

ただし、源氏物語のメヅラシの例がすべて、右のように説明できるわけではない。

字^{あざ}つくことは、東の院にてしたまふ。東の対をしつらはれたり。上達部、殿上人、メヅラシクいぶかしきことにして、我も我もと集ひまいり給へり。（少女）

夕霧が大学に入学するにつき、字を付ける儀式を行った。上層貴族の子弟には珍しいことなので、上達部、殿上人がぜひ見ておこうと集まったということである。この場合は、「めつたにない」というような、現代語の「めずらしい」と同じような意味であろう。

よきさまに言ふとては、よき事のかぎり選り出でて、人に従はむとては、又あしきさまのメヅラシキ事をとり集めたる、みなかたがたにつけたるこの世の外のことならずかし。（螢）

光源氏が物語論を述べているところだが、「悪しきさまのメヅラシキ事」であるから、栄華の象徴として言祝ぐ用法とはいえない。

こうした例と、栄華の表れを言祝ぐ例との関係については、今後検討していくこととしたい。

最後に、小論の冒頭に挙げた桐壺巻の例は、なぜメヅラカナリが用いられているのかについて述べる。

実は、実際に赤子の面倒を見ていたり、赤子を見たりしている場合には、他の個所でもメヅラカナリが用いられる。

白き御装束し給ひて、人の親めきて、若宮をつと抱きてぬ給へるさま、いとをかし。身づからかかること知り給はず、人の上にも見ならひ給はねば、いとメヅラカナリうつくし、と思きこえ給へり。(若葉上)

明石中宮の産んだ若宮の御湯殿の世話をする、紫の上の思いを描いたところである。要するに赤子という存在は、上層貴族が構成する栄華の世界に、いまだ属さないものなのではないだろうか。人知の及ばない、不思議な存在なのであろう。そこでそれはメヅラシではなく、メヅラカナリと形容されるのであろう。

対して、袴着を終えた光源氏にメヅラシが用いられていることは、そこでは彼が、栄華の世界の美の対象になったということを示している。袴着とは子どもの御披露目なのであり、ここで光源氏は上層貴族社会にデビューしたのだと解釈してはどうだろうか。

なお引用した源氏物語本文は、新日本古典文学大系を用いたが、読みやすさを考慮して、歴史的仮名遣いに統一したり、送り仮名を補うなど、表記に手を加えている。